



「おかえり」

T・S(43歳)

息子が小学校へ入学して間もない頃、クラスに友達が一人もいなかった。一人で登校する姿を見送ったものの、心配で下校の時間になると家の前で待っていた。一年生とはいえ、すでに友達ができた子供たちはキャーキャーと楽しそうに走りながら帰って来る。その後ろから、とぼとぼうつむきながら息子が帰ってきた。どこか寂しげで小さな体に抱えきれないほどの不安や悩みを背負っているように見えた。母としてそばにいながら何もできないことがはがゆかった。

学校での様子が気になり、先生に相談しようとしていた矢先だった。いつものように家の前で待っていると、遠くに二つの小さな影が見えた。楽しげにくっついたり離れたりしながら近づいて来たが、話に夢中で私に気づかない。「おかえり。」言い終わらないうちに涙がこぼれそうになり、空を見上げた。

「いまね、給食当番が同じなんだ。一緒に帰ろうって言ったら『いいよ』って言ってくれた。」息子は満面の笑みだった。隣にいた男の子も一緒に笑っていた。親の手を借りずに、自分の力で大きな壁を乗り越えた息子の姿に胸がいっぱいになった。

毎年入学したばかりの一年生を見かけると昨日のここのように思い出す。あれから息子は三年生になった。

「ただいまー。」今日もとびきりの笑顔と共に元気な声が響く。

「おかえり。」



「煙の中の記憶」

若松杏奈（21歳）

タバコの匂いは今でも好きだ。私は現代人よろしくタバコとは無縁の生活をしているが、それでもふと鼻に流れ込むその匂いは、随分と懐かしい記憶を呼び起こしてくれる。

父は、私が小学生の頃にタバコをやめた。アパートのベランダで、夜、静かに椅子に座り、一人タバコを燻らせている父は、なんだか隣に座りたくなるような、そんな背中をしていた。

私はというものの、父がベランダに出ると着いて行き、学校のことをあれやこれやと話すことに夢中になっていた。今思えば嫌いだったのだろう。寂しそうな背中をしている父を見ることが。

あるときピタリと父がタバコをやめた。知らない間に本数を減らしていたのかはわからないが、急に吸わなくなった。それを嬉しく思う反面、もうベランダで寒いだの暑いだの言いながら、二人で話すことはないのだろうと思うと、なんだか胸の空くような思いがした。

歳をとって、私も就職した。一人の時間がほしいとふと思うと、あのときの父はそんな一人の時間を過ごしていたのかもしれないと考える。少し申し訳なさもあるが、私に辛抱強く付き合ってくれたことにとても感謝している。

周りからタバコの匂いが消えていく。良いことなのだときっと思う。マナーを守らない喫煙家は好ましく思わない。しかし、あのとき見た煙の揺らぐ夜空と、暖かな父の声と冷たい椅子を、思い出させてくれるのは、確かにタバコの匂いだけである。



「家族の思い出」

青木瑠美（高1）

私の両親は障がい者です。「障がい者」という言葉だけで偏見をもつ人もいると思いますが、私は両親との生活の中に言い表せないほどの愛を感じながら生活しています。

母には聴覚に障がいがあり、私は物心ついた頃から手話での会話が当たり前の中で育ってきました。手だけでなく、顔の表情や、大げさなジェスチャーで意思を伝えるのが手話の魅力です。母は高校生になってから、耳が聞こえづらくなったそうですが、歌が好きで、いつも車の中で熱唱しています。

父は生まれつき体が小さいというハンディを背負って生きてきました。様々な困難があったとは思いますが、今では農業をする傍ら、手話を教える先生をしていて、毎日充実した日々を送っているように見えます。

私はこんな素敵な両親の元に生まれてきてよかったと思っています。両親のおかげで、健常者はもちろん、手話での意思疎通に頼らざるを得ない人も含めて、たくさんの人と会話を楽しむことができるようになりました。障がいは一つの個性です。人を愛することだって、未知の世界に挑戦することだってできます。

「家族の思い出」はたくさんありますが、毎日毎日の新鮮な出来事全てが思い出となって限りなく積み重なる日々です。



しまニッコ賞

「いないけど、父のいる日常」

H・S（31歳）

「お父さんがおったら喜んだね」

私と母のどちらかが口にする言葉である。1週間に1度くらいの頻度で父のことが話題になる。

堅物で、頑固で、関わりにくい人だった。私も母もよくぶつかったし、不満に思うことも多々あった。そんな父は救急車で病院に運ばれ、入院後、そのまま息を引き取った。亡くなって4年になる。

結婚して子どもにも恵まれ、この4年で家族構成もずいぶん変わった。母と同居するようになり、母、主人、子ども2人と私。5人家族で毎日にぎやかだ。堅物な父は、寂しがり屋で子ども好きな一面もあったので、私たちの楽しそうな様子を見たらうらやましがらうだろう。父とぶつかり大変だったことも今では笑い話である。入院中は心身ともに辛かったが、今では笑って思い出せるようになった。

父は孫に会えずにこの世を去った。子どもが好きだったのだから、我が孫となれば、一層かわいがっただろう。冒頭の言葉は、子どもたちの遊ぶ姿を見ながら、いつも口にするセリフ。

孫に会わせてあげたかった気持ちは強いが、父が生きていれば、母と同居することもなかっただろう。父が与えてくれた笑い声の絶えない日々感謝しながら、家族仲良く過ごしたい。



「おばあちゃんと温泉」

田邊実結（17歳）

小学生の低学年の頃まで一緒に暮らしていた祖母とは、私たちが近所に家を建てたあとも、夜、お風呂に入りに来てくれたり、学校へ行くときには、必ず家の前に立ってくれたりして「行ってらっしゃい」と見送ってくれました。祖母とは月に1回くらい、お出掛けもしました。特に冬になると、色々な温泉に入りに行きました。気に入った温泉には何度も行っていました。冬の温泉には気持ちが良いなあ喜んでいて祖母をよく覚えています。

そんな祖母と出掛けるのが減っていったのは、中学2年生の頃でした。母から「おばあちゃん胃がんで、もう長くないよ」と言われたときのショックはとても大きなものでした。祖母が自宅で日に日に細くなっていくのを見るのがとても辛かったです。そんな祖母との最後の会話は、期末テストの前日でした。「みーちゃん、テストがんばーだで。」そう言って細くなった腕をのばして、手をにぎってくれました。祖母が亡くなったのは、それから何日か経った日の朝でした。

私は祖母に対しての後悔がたくさんあります。祖母に高校に入学できたことを教えてあげたかったし、看護師という夢を持ったことや、今は大学に入れるように勉強を頑張っていることも伝えたかったです。祖母が亡くなってから、家族で出掛けることが減り、温泉にも行かなくなりました。祖母への報告も含めて、思い出巡りに温泉入りに行こうよ、と家族に提案してみようと思います。



「家族の思い出」

山本 興（52歳）

高校時代、体育祭のフィナーレはフォークダンスだった。一部は順番にパートナーを代えて、そして二部は「固定パートナー制」で踊るのである。

「固定パートナー」とは男子から、もしくは女子から事前に「第二部で踊ってください」とお願いし、そのパートナーとずっと（曲が終わるまで、アンコールもあり）踊るのである。我々の所属する部活動では、男子は必ず女子に申し込み、第二部を踊るようにとのお達しが先輩から出ていた。それが部の伝統である。数人に断られた末、何とか中学校の同級生がその任を引き受けてくれた。

さてさて、お願いしたからにはカッコよく相手をリードしなければならない。練習相手に選んだのは父だった。小学校教員だった父は、「フォークダンスの教科書にモデルで載ったことがある、踊りには自信がある」といつも言っていた。半信半疑でお願いしたら、父は申し出をあっさりと受託、練習場は我が家の表の八畳間だ。父の踊りっぷりは本人の弁に違わぬものだった。くるくると男性の大人二人がワルツターンを踊る姿は思い出しただけでも滑稽で小っ恥ずかしい。

迎えた本番、相手の女の子から「（リードが）上手だった」とおほめの言葉。それを伝えた父も喜んでいて。子煩悩だけど不器用な、亡父とのかけがえのない思い出である。



「釣り糸のきずな」

I・Y (54歳)

昔、松江に3人の兄弟がいた。年は3才ずつ離れており、末っ子が幼稚園、上の二人が小学生の時であった。ある日、3人は近くの堀川に釣りに出かけた。兄達は釣竿を持ち、三男は網を持って出かけていった。

ところが突然、次男のまさおが青い顔をして家に駆けこんできた。そしてこう叫んだ。

「おにいちゃんがよしお（弟）を釣った！！」

しばらくするとハンカチで鼻を覆ったよしおと長男が帰ってきた。たまたま通りかかった観光客が釣り糸をハサミで切り、ハンカチを貸してくれたというのだ。家では両親が一生懸命、よしおの鼻から釣り針を取ろうとしたが、針にかえしがあってなかなかはずせない。結局、病院に行って医者にとってもらった。

ある年の年末年始に旦那の実家で兄弟たちが集まり、両親からこの話を聞いた。こんな悲惨な話なのにおかしくて、みんなで大笑いした。特に「まさおがまさおになって家に帰ってきた」のくだりには腹を抱えて笑った。

「これから毎年、一生この事を言われるわ」と長男があきらめ顔で言った。そう毎年、こんな風にみんなが揃って昔話で笑えると思っていた。ずっと続くと思っていた。でももう両親はいない。釣り糸でつながっていた息子たちもそれぞれ家庭を持ち、年末年始に兄弟が集まることもなくなった。正月がくると時折、あの時を思い出し、そして両親のことを思う。

お父さん、お母さん、あなた達の息子はみんな元気で過ごしています。



「家族の絆」

吉儀芽似（16歳）

あれは、私が学校で上手くいかなかったことがあり、少々落ち込み気味で家へ帰った時のことです。何となく私の気持ちを察したのか、母はいつも通りの元気な「お帰り！」ではなく、少々抑え気味に「おかえり。」と一言。それ以降会話が続くことはありませんでした。

次の日の朝、まだ昨日を引きずったままの私はやる気のない体を持ち上げいつも通り学校の準備をしていました。母が用意してくれたお弁当と水をかばんにしまい、黙って家を出ました。そして、お昼になり、お弁当を開けて、私は手を止めました。目の前にあったのは、私の大好きなもので埋め尽くされたお弁当と小さい紙切れに「頑張れ！」と書いたメッセージでした。私は、母が私の落ち込んでいる姿を見て少しでも元気づけようと試行錯誤してくれたのかなと思い、とても嬉しかったし、元気が湧いてきました。

「家族」というものは特別なものだとは私は思います。言葉で言わなくても言いたいことが分かったり心が通っているかもしれないと感じたり。今回の出来事は、それを象徴するものだったなと思います。家族という仲でしか味わうことのできない温かさ、優しさ、つながりというものを大切にして、これからも過ごしていきたいなと思いました。



「『家伝』の子守歌」

伏谷次義（61歳）

この年末年始に、息子夫婦が生後4か月の孫を連れて帰ってきた。仲睦まじい両親に可愛がられる赤ん坊を見ているだけで、こちらまで幸せな気持ちになった。そして若い二人が協力して我が子を風呂に入れる姿に、30年前の私たち夫婦を重ねた。子どもが夜泣きをした時には、父親である息子が「家伝」の子守歌で寝かしつけるという。聞いてみると何の事はない。乳飲み子だった息子に、かつて私が歌ったいいかげんな歌だった。70年代フォークのメロディに合わせて、ひたすら「寝ようぜ」と繰り返すだけである。

そういえば二児の母親となり子育て真っ最中の娘も、私が昔歌った別の「口から出任せソング」を夫と一緒に面白がっている。

きっと孫たちにも伝わっていくのだろう。こうなると、まさに「家伝」である。

あたかも結婚披露宴のスライドショーのように、お互いにその時々で思い出す場面は違うのだろうが、同じ記憶を共有する家族は世代を越えてリレーされるようだ。



「母の優しさ」

岸本海音（17歳）

「なんかあった？」そう言って声をかけてくれる私の母は、いつも私が落ち込んでいることに気づき、そっと見守ってくれます。

ある日、私はそんな母の優しさへもイライラしてしまい「ほっといてよ」と冷たい言葉をかけてしまいました。その日の夜、私が目をつむりうとうとしていると、母が私の部屋をノックする音が聞こえました。いつもなら「おやすみ」と言うのに私は寝たふりをして言いませんでした。すると母は静かに私の部屋に入り、私の頭をなでながら「何かあったらいつでも聞くからね。お母さんはずっと味方だよ。」と言い静かに出て行きました。私は母へ当たってしまった罪悪感と母の優しさを改めて感じ涙が止まりませんでした。

母は私にとってのたった一人のお母さんであり、感謝を忘れてはいけなしいと思いました。そして、私は母のように優しく何事にも一生懸命な女性になりたいと思います。母は私にとってずっとずっと憧れで私のなりたいと思う女性です。いつもありがとう大好きだよ。